

# エンタ目

—— 仙頭 武則

## ■ 極私的映画論

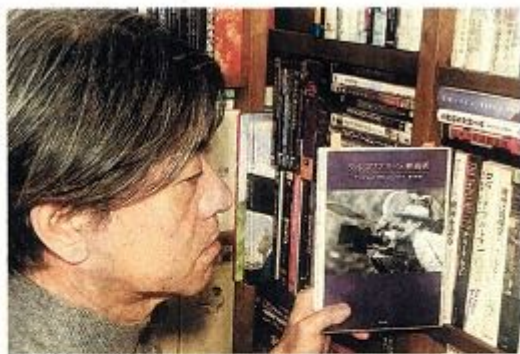
二〇二二年四月、コロナ下で始まった本稿の連載も、今回を含め三回の掲載を残すのみとなった。最後は「極私的映画論」を展開したい。あらかじめ記しておくが、映画の正誤について正すものでもなく、だからといって断崖を下ろして叫び、こだまする自分の声を聞くためだけのものでも決してない。人生の多くを映画作りに費やしてきた「私」の見解だ。

複雑極まりない映画の特性に関する問題は、フランスで最初に有料上映されたと言われる映画「ラ・シオタ駅への列車の到着」以来今日に至るまで、いまだ万人の一致した解決は見えていない。「われわれの誰もが自己流に理解し、設定し、その可能性を、芸術の法則を認識して、その方法

## 「分かりやすい」映像表現とは

を解決しようと試みている」。これは、一九八九年に発行され、二〇〇八年に翻訳されたアンドレイ・タルコフスキの著書「タルコフスキの映画術」からの引用だ。

映画を「第七芸術」とする前提の講義録だが、一九七〇年代のハリウッド映画を浴び続けた私には「映画芸術」と大上段に構える言説に抵抗があるが同意はする。タルコフス



「タルコフスキの映画術」を手にする筆者

キーの言う芸術とは「理解されるものでなければならぬが、理解できるものであるべきだ、とは言っていない」のであり「幼児に合わせるように子どもっぽい話し方をすれば、必ず悪い結果を生むことになり、私には「分かりやすい言葉」がどういふものか理解できない」とも言っている。

この「分かりやすい言葉」とは劇中におけるせりふではなく、映像表現を指している。創作者の重要な指摘だ。この本には「ストーリー」という言葉は一度たりとも登場しない。繰り返されるのは「映像のイメージ」「映画ドラマツルギー」「エピソード」であり、最も重要な言葉は「時間」と「空間」だ。次回はこのワードをひもといっていくことにする。

(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー)次回掲載は二月十六日)